

困った時は、鶏に聞け! 生産現場の主役は— あくまで「鶏」である

【プロの鶏飼いになるために、
役立つ情報・知識をリリース】

(株)ピーピーキューシー代表取締役社長
白田一敏氏に聞く



(株)ピーピーキューシー現代表取締役社長の白田一敏医師(獣医学博士)に、本誌2008年9月10日から2014年12月25日まで毎月124回にわたって執筆していた連載コラム「困った時は、鶏に聞け!」の単行本化が実現し、弊社から近日発行の運びとなった。

筆者の白田氏は、1968年生まれ、東京都出身・茨城県育ち。福島県二本松市を拠点として、主に東日本エリアの採卵養鶏のフィールドで活躍する日本でも数少ないニワトリ専門獣医師の一人。単行本化に当たって、執筆当時の思い、休載後も国内外で発生が続く高病原性鳥インフルエンザ、飼料高騰、アニマルウェルフェアなど、業界を取り巻く環境変化について聞いた。(編集部)

常にフラットな気持ちで 鶏の反応を見て問題解決へ

——単行本「困った時は、鶏に聞け!」がいよいよ発刊となります。当初は7年前の連載記事を書籍化することに戸惑いもあったと「あとがき」に書かれています。

白田 今回出版のお話をいただいた

時に、まず感じたのは、最後の原稿が掲載され、休載となってから7年が経過しているわけですね。時代がずれているのではないかと、内容が現状にそぐわないのではないかと正直思いました。ただ一部読み返してみたら、今でも養鶏場さんの生産会議などで若い世代の人たちと話をしている時に、そこに書かれていることと同じ内容の話を聞いて、教えることに気がついたのです。

やはり、7年経っても鶏自体は変わらないし、特にあれから高病原性鳥インフルエンザの大発生もあって、一般の人たちが現場に入れない環境になってきています。関係者以外の人にはまったく取っ付き難い状態となる中で、養鶏現場の人たちにぎくばらんな内容を教える立場としては、この内容なら、まだまだ使えるのかなと思えました。

——「困った時は、鶏に聞け!」のタイトルが本書の一貫したコンセプトであり、すべてでもある。

白田 そうですね。私自身も決して高名な先生ではないので、自分の理論や主張を養鶏現場の人たちに教えたり、残したりするのはなく、常にフラットな気持ちで現場を見るよ

うにしています。現場では鶏がいろいろな反応を、いろいろな現象に対してするわけです。それを専門家としての経験から自分も正直に汲み取って解析していく。他所の現場で何かトラブルが起こった時に、そういった経験を紹介し、問題の解決に当たってきました。

その繰り返しですね。私の今の仕事でも、鶏の反応をフラットな気持ちで見えて把握し、現場の指導に活かしています。それ以上でもそれ以下でもないのですが、考え方は一貫していると思います。

鳥インフルエンザ被害 留鳥、野生動物に波及か

——本書には何回か高病原性鳥インフルエンザの話題が出てきます。休載後も国内外で度々流行を繰り返して、昨年度は過去最悪の発生となりました。今年度は再びH5N1亜型の感染が、4月、5月に入っても散発的に確認されています。

白田 連載が終わったのが2014年末。その後、私も農林水産省の家禽疾病小委員会の専門委員を拝命し、外野で見ていた連載当時よりもより多くの詳細な情報に接するよう

になり、委員の一人として農林水産省動物衛生課に提言、提案、アドバイスをする役割を担ってきました。

実際、鳥インフルエンザは毎年、あるいは数年おきに発生しています。昨シーズンはH5N8亜型の発生が多く、今シーズンはH5N8亜型とH5N1亜型の二つが確認されている。どうしてそうなったのかは正直わかりません。しかし、過去最悪となった昨年ぐらいから発生パターンなどを基に、被害がなぜ広がってしまったのかなどを分析し、講演等でご紹介しています。

今シーズンは、今までになかったいくつかのパターンが見られます。一つは、H5N8亜型とH5N1亜型の2タイプの流行が見られたのが特徴ですね。もう一つは例年、ゴールデンウィーク前までに発生が収まるのが普通ですが、今年は5月半ばにも東北、北海道で発生がありました。三つ目の特徴は、カラスや猛禽類などからの検出が北海道を中心に続いていること。従来は渡り鳥がウイルスを運ぶとされてきましたが、留鳥への波及が心配されます。

北海道大学でキタキツネ、タヌキからもウイルスが検出されました。

いずれ遺伝子解析の結果が出ると思いますが、例えば、鳥型のインフルエンザからヒト型に、哺乳類に罹りやすいウイルスに変異が起きているのかどうか。あるいは、キタキツネからキタキツネ、タヌキからタヌキにうつっていくようなものなのか? 関心もっています。養鶏業界はこれまで冬場に気を付ければよかったわけですが、解析の結果、野生の哺乳動物などでウイルスが保持されているようだと、感染のリスクに年中晒されることとなります。

それから、今まではどちらかというところ、九州など西日本での発生事例が多かったけれども、今シーズンは北海道、北東北でもかなりの被害を受けた。ウイルスが運ばれるルートやパターンが例年とはだいぶ変わってきています。当初は韓国から九州方面に来て、季節が進むに従って、東日本でも発生が確認されるパターンでした。今シーズンは昨年11月に秋田から始まり、鹿児島島に出て、北東北、北海道でも発生が続いた。発生パターンはかなり変わってきていますね。こういうものを解析し、養鶏業界に対して対策を提言、提案していくのも、家禽疾病小委員会の

委員として大切な仕事だと思っています。

——非常に危惧すべき状況です。白田 私も含め、特に生産者の方々が枕を高くして眠れない状況がいつまでも続くというのは、精神衛生上も大変良くない。今は豚熱がまさにそのような状況ですね。今年は北海道でカラスの死亡事例が相次いで報告されています。死んだ渡り鳥を食べてカラスが感染し、死亡したと考えるのがベーシックな見方だと思っています。例えば、遺伝子解析でカラスからカラスに、あるいは留鳥から鶏に感染しているような変異が確認された場合、一年中感染のリスクがあることになるので、養鶏場の対応はかなり難しくなります。

飼料はコロナ前の2倍 経営努力だけでは限界に

——本書の前半に、サルモネラの話が何回か出てきますが、卵由来のサルモネラ食中毒は年々患者数、事件数ともに減少を続け、昨年の統計では遂にゼロとなりました。

白田 この間、私の知る限り、養鶏場さんでも衛生対策、ワクチン対応の普及に伴って現場はかなりレベル

アップしてきますので、かつてほどのリスクはなくなってきたかと思

います。それに加えて、管理手法―温度管理やHACCP、ISO22000、FSSC22000などの考え方の普及も寄与していると思います。一番の効果はワクチンなど思うのですが、食中毒は確かにだいぶ減ってきている。これは養鶏場さんの努力の賜物だと思います。しかし、食中毒事例があった場合、今でも原因食品は卵であるのでは？と真つ先に疑われるのが現状ですし、件数は少ないものの油断できないと、現在も監視が続いています。

――経営環境、情勢の変化について捕捉したいことは。

白田 配合飼料価格はかなり高騰していますし、7月以降もトン当たり1万円近く上がる話が実際出ています。そうすると、コロナ前に比べてエサ代が2倍近くになってしまふ。この事態にどう対応していくかが、コロナ以降の一番の課題ですね。皆さん、経営努力をすでにされているとは思いますが、ただ、どちらかと言えば内向きな、コストを下げて節約していく方が多いようです。現状はおそらく、そのような努力だけでは

成り立たない。価格をきちんと見ていたかかないと難しいのかなと。

それがひいては働く人たち、関連する人たちにもすべて跳ね返ってくる。例えば、卵の値段は相場が決まるとか、今まで常識とされてきたことが本当に正しいのか、従来のままでもいいのかと。私の専門である鶏病についても、教科書的に書かれたものが本当に正しいのか、現場は違うのではなにかというのが「困った時は、鶏に聞け！」でも一番書きたかつたことです。常識的なことを疑いつつ、業界の発展に少しでも貢献できたらいいなと思っています。

養鶏場は大規模化し、寡占化されてきています。卵の生産も増えて、市場にあふれているので値段が上がらない。規模拡大していくことが勝利の方程式だったのかもしれないが、社会環境や情勢変化の中で徐々に、いろいろな意味で考え方を変えていかなければいけないとは思っています。私は「困った時は、鶏に聞け！」の前に、本誌に「ニワトリの獣医師と呼ばれたくて―所懸命から一生懸命へ―」という連載を(30歳前後で?)させていただいた。私も50歳を過ぎて、今の若い世代―

白田 「困った時は、鶏に聞け！」は、別の言い方をすると、現場の人たちに対して「自分が鶏になったつもりで考えれば、大きなミスはしない」と、お話をしているのです。鶏の気持ちになれば、エサが足りなければ足りないし、暑ければ暑い、寒ければ寒い、水が切れたら卵を産まなくなる。難しく考えなくても、自分が鶏になったつもりになれば、自ずと答えが出てくる。

――「鶏の気持ち」の関連で言うと、日本でもここ数年、良い意味でも悪い意味でも関心が高まりつつある、アニマルウェルフェアについて何かご意見はありますか。

白田 アニマルウェルフェアに関しては、私もOIE連絡協議会の臨時メンバーとして何回か意見を申し上げました。私の考えは、まず大前提として生産者と消費者の合意と言いますか、動物愛護に則った卵や肉を買いたいという消費者の方が多ければ、生産者もその要望に合わせていかなければ売れないわけで、当事者同士で話し合っただけで済ませても思っています。だから私は賛成でも反対でもなく、フラットな立場です。ただ、養鶏場に行っただけのよう

に鶏を見ている者からすると、いわゆる動物愛護団体の方が「これが鶏にとって幸せなんだ」と主張されていることが、本当にそうだろうか？と疑う場面を多く経験しています。例えば、OIE連絡協議会の場でも話しましたが、10羽の鶏に対して10個の巣箱を設置したとします。1羽につき一つの巣箱が設置されて、ハッピーだと思ってもいいかもしれませんが、実際に、そういう場面になったら両サイドの巣箱に5羽ずつ集中して、真ん中の巣箱には見向きもしないのが鶏です。

例えば、我々の住居のひとつであるマンションの事例を挙げれば、両サイドの角部屋は賃料が高いわけですが、人間の場合は、自分の財布と相談して真ん中の部屋でも良いと思う人はいる。ところが、鶏は本能の赴くまま、居心地が良い両端の巣箱に集中してしまう。1羽しか入れない巣箱に5羽集まれば喧嘩になり、突き合ったり、乗っかられたり、追い出されたりする。

――最悪の場合、死に至る。
白田 追い出された鶏は外で卵を生んだりするわけです。ただ、生き物とは、そういうものなのです。縄張



白田一敏

経営者のご子息や新しい従業員さんのお役に少しでも立ちたいと、こういう原稿を書いてきました。若い人たちが将来もこの業界でやっていきたい、面白い、実入りもあると思えるような業界であってほしい。

やはり新しい考え方や仕組みを取り入れていかないと、買う側の論理(都合)で、値段も全部言いなりになってしまうのではないかと心配しています。仮に相場取引であったとしても、原価の上で価格が動くのならばともかく、原価を下回る時があるわけです。そうなる理由はさまざまあると思いますが、一般的に他の業

りもあるし、酷い虐めもあるのです。よく、これが鶏の本来の姿であるとか、自然な飼育方法だと言われますが、鶏にとって、自然という言葉の中には、生存のリスクも同時に含まれることも併せて理解してほしいと思っています。

皆さんの身近にいる猫で説明すれば、ペットとして飼育される猫の寿命は15年前後だったと思います。私が大学時代から飼っていた猫も16年ぐらい生きました。一方で、野良猫の寿命は短く、数年と言われています。自らの本能に従って生きていくはずの猫でも、自然の中に含まれるリスクにさらされると、結果的に寿命が短くなってしまっています。5つの自由をニワトリに与えるべきだと仰っている方々の主張が、本当に毎日鶏を見た上でのお話なのか、単なるイメージの話なのか。いずれにしても、どちらが鶏のことをわかっているのかと言えば、毎日鶏の世話をしている人にはかなわないのではないかと思います。

販売のツールとして、平飼いで巣箱や止まり木、砂浴び場を設けてほしいとか、5つの自由を与えたものが欲しいと言われるなら、それはそ

界では考えられないことです。若い世代の人たちに頑張ってもらう、業界がより良くなるためにはそれなりの収入を確保する必要があるだろうし、それなりの値段で販売しなければ優秀な人材は集まらないのではないかと思います。

自分が鶏になったつもりで考えれば、大きなミスはない

――本書はまさに、次代を担う若い従業員、後継者、場合によっては外国人技能実習生の方々にもぜひ読んでいただき、基本を押さえた上で、鶏の声に耳を傾けて欲しい。

れで構いません。一方で、現状のケージでも、飼育されている鶏が平等に暮らせる工夫が種々なされていることも理解してほしいと思っております。そうでなければ、成績的には産卵率97〜98%とか、素晴らしいスコアは出せません。エサも水も均一に給餌され、空調もきちんとしていく。環境が悪ければ鶏はそこまで産まないのです。

私は現場の獣医師なので、政治的なことや、販売先の流通・加工業界がどうされたいのかはわかりませんが、当事者同士がよく相談して、決めたらいいと思います。もしケージ以外の方法を選択するのであれば、当然、手間がかかって効率も悪くなります。鶏舎設備の更新にも莫大な費用がかかります。高騰している飼料費も一部が無駄になる恐れもありますので、それに見合うコスト負担を消費者の皆さんにはお願いしたいですね。

――ありがとうございました。